



# 書を愛し、書と向き合って

近藤えり子さん (63歳)

## 二つの意味があった受賞

集中力や忍耐力、精神力を養えるといわれる書道。子どものころに習っていたという人も多いのではないのでしょうか。今回は、全国公募の書道展で入賞を果たした近藤えり子さんにお話を伺ってみました。

## 大胆かつ繊細な作品に

書道団体「以文会(いぶんかい)」が開催した「第56回以文会書展」でANET賞(愛知芸術文化協会賞)に選ばれたのは、東郷町在住の近藤えり子さんです。書をたしなむときは、近藤心嘉(しんか)を名乗っています。

近藤さんの作品は縦6尺(約180センチ)、横3尺(約90センチ)。枠の中に、「石山切(いしやまぎれ)伊勢集」を写した6枚の書が貼られています。

「石山切伊勢集」は、継ぎ紙の技法を駆使した料紙の美しさで有名な作品です。近藤さんは「大胆さと繊細さを併せ持つところにひかれました」と話します。

「この作品は、最初は墨をたっぷりつけて書きはじめ、最後はかすめるほど細くなるまで書いてあるのが特徴です。書いているときに墨が減ってくるのと焦るのですが、筆運びを速くするとさらにかすれてしまいます。焦ったときこそ、急がず落ち着いて書くことを心掛けました」

近藤さんは小学2年生で書道を始めました。中学時代は一時書道を離れますが、高校では書道部に入部。しかし、また大学以降は書道から遠ざかり、結婚後、お子さんに書道を習わせたことがきっかけで、20年ほど前に以文会に入会しました。

以文会では昇級段試験に合格すると、漢字、仮名それぞれで級、段、準師範、師範、教範という順に昇格していきます。現在、漢字で教範、仮名で師範の近藤さんですが、「小学2年生から習っている漢字と違って、仮名は高校生から本格的に始めたので、漢字よりも苦手なです」と話します。

それでも仮名をもっと上達させたいと数年前から仮名に力を入れはじめ、年に一度の以文会書展には仮名の作品を応募しています。

「最近仮名で賞をいただけるようになり、我ながら成長を感じています。地道にやってきたかひがありました」

また、入賞は、近藤さんにとって成長を感じられる以上の意味もありました。「実はずっと指導してくださっていた先生が最近ご病気になるってしまい、先生から『もう指導はできない。あなたも師範になって10年もたつたのだから、これからは自分一人でやっていきなさい』と言わ

れてしまったのです。何をどうやって書くか、どの作品を出すか、すべて自分で決めている方向が正しいのか分からなくなっていたのですが、賞をいただけたことで『自分の方向性は間違っていないかったのだ』と自信を持つことができました」

## これからも書道を続けたい

以文会は、手本を写す「臨書のりんしょ」を基本とする団体ですが、近藤さんは書き手が自由に筆を運ぶ「自運(じうん)」にもこれから挑戦したいと話します。

「趣味で短歌も勉強しているので、自分の歌を自分の文字で書くのが目標です」書道が好きで、大人になって再開してからは一度も辞めたいと思ったことはないという近藤さん。

「書道はこれでよしというところがないですからね。永遠の友達です。これからますます付き合っていこうと思います」

書を愛し、書と向き合って20年。書人近藤心嘉の進化、そして深化から目が離せません。

